2025 年度薬害教育研究班の成果について
――冊子作成・シンポジウム開催・国際発信に向けた基盤整備を中心に――

矢﨑千華（関東学院大学）

薬害教育研究班は、「記録から展示へ」という研究班の方針に沿って活動した。これまでの研究班の成果を発信する薬害ポータルサイト（薬害資料データ・アーカイブズの基盤構築・活用に関する実践的研究 2025）については、昨年度に公開を行ったが、今年度は国際発信に向けて英文版を作成し公開した。また、2 月には複数の関係組織との共催により、「歴史と現在をつなぐ――薬害エイズから学ぶ市民社会と学問」と題したシンポジウムを開催した。さらに、当該ポータルサイトを基に冊子を作成し、同シンポジウム等の機会に配布した。以下、これらについて報告する。

１．薬害ポータルサイトの英文版の公開

昨年度、本調査研究班の活動を発信するホームページ（「薬害（D.I.S）ポータルサイト」（https://disarc.org/））を制作し公開した（薬害資料データ・アーカイブズの基盤構築・活用に関する実践的研究 2026）。これを踏まえ、国際発信に向けた基盤整備の一環として、今年度は当該サイトの英文版（https://disarc.org/en/）を公開した。

翻訳は、研究協力者である一般社団法人薬害研究資料館の景山千愛氏と共同で行い、単なる言語の置き換えにとどまらず、各薬害の背景や制度的文脈が適切に伝わるよう留意した。その過程で、現行のホームページにおいて、より伝わりやすい表現へ修正すべき箇所についても確認することができた。

また、今後の継続的な情報発信を見据え、更新・運用体制の整備についても検討を行った。

２．薬害を紹介する冊子の作成

薬害に関する基礎的知識および本研究班の活動内容を広く共有することを目的として、「薬害から学ぶ」と題したパンフレットを作成し、シンポジウム等の機会に配布した。パンフレットの作成にあたっては、初学者にも理解しやすい内容構成としつつ、薬害の歴史的背景や制度的文脈についても適切に伝えることを重視し、ホームページの内容を基に構成した。

本冊子は、巻頭言、各薬害の概要（簡易版および詳細版）、年表、参考文献、奥付等から構成され、全 40 ページで作成した。各薬害について段階的に理解を深めることができるよう、簡易版と詳細版を併置するとともに、全体像を把握するための年表を配置するなど、学習の導線を意識した構成とした。

掲載した素材については、『薬害とはなにか――新しい薬害の社会学』（本郷・佐藤編 2023）で使用されたものを中心に、薬害スモンおよび薬害エイズの関係者の協力を得て提供いただいたものを使用した。

本研究班として紙媒体による冊子を作成するのは初めての試みであり、ホームページ内の写真を活用するとともに、新たな素材も加え、視覚的な面でも工夫を行った。これにより、薬害に関する学習資源としての基盤を整備するとともに、研究成果の社会還元の一環としての役割を果たした。

一方で、各薬害を横断的に整理した全体年表を掲載するには至らなかったため、この点については今後の課題としたい。

○冊子の表紙



◯目次

01　クロロキン薬害　…… 6
02　薬害スモン　…… 8
03　サリドマイド薬害　…… 12
04　薬害筋短縮症　…… 15
05　薬害エイズ　…… 17
06　薬害肝炎　…… 20
07　MMRワクチン薬害　…… 23
08　陣痛促進剤による被害　…… 25
09　薬害ヤコブ病　…… 28
10　イレッサ薬害　…… 31
11　HPVワクチン薬害　…… 34

３．シンポジウムの開催

本年度は、2026年2月に、関係団体との共催により「歴史と現在をつなぐ――薬害エイズから学ぶ市民社会と学問」と題したシンポジウムを開催した。本シンポジウムは、関東学院大学横浜関内キャンパスにおいて実施され、関東学院大学社会学部、関東学院大学人文学会・社会学部会、特定非営利活動法人ネットワーク医療と人権、日本学術振興会科学研究費補助金「薬害をめぐるコンフリクトと制度化――社会秩序形成過程にみる薬害の社会学」研究班との共催として実現した。

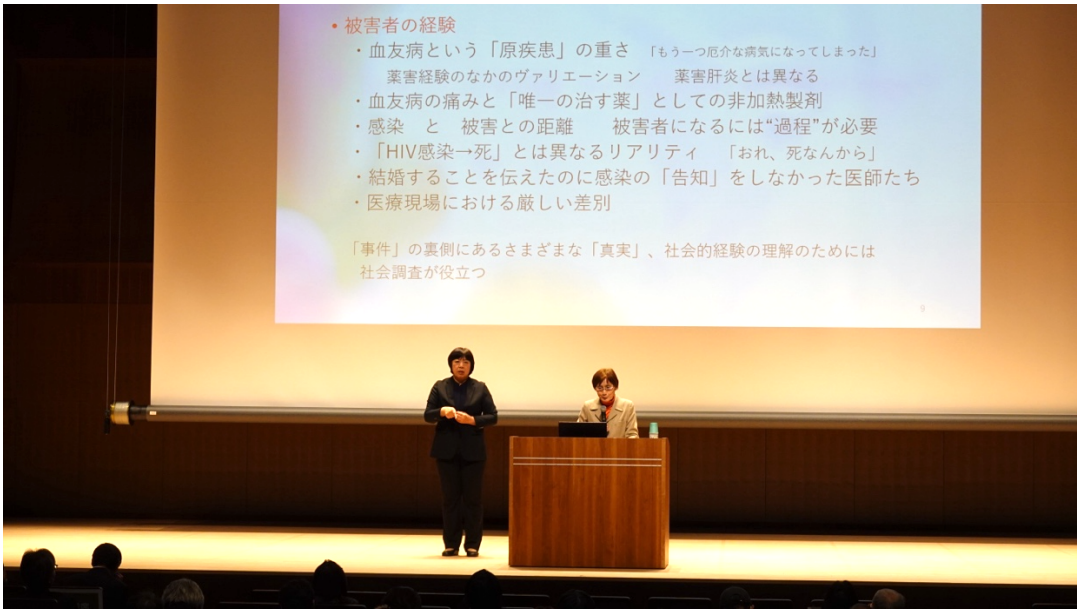
当日は、村上陽一郎（東京大学名誉教授・国際基督教大学名誉教授、輸入血液製剤による HIV 感染問題調査研究委員会（養老委員会）副委員長（2001～2009））、養老孟司（東京大学名誉教授輸入血液製剤による HIV 感染問題調査研究委員会（養老委員会）委員長（2001～2009））、蘭由岐子（追手門学院大学名誉教授）、花井十伍（特定非営利活動法人ネットワーク医療と人権理事長、一般社団法人薬害研究資料館理事長）らが登壇した。

本シンポジウムでは、薬害を主題として直接的に議論するのではなく、感染症の歴史的展開の中に位置づく事例としての薬害エイズ、そして、日本の医療体制の問題が取り上げられた。討論を通じて、継続的な調査研究の重要性があらためて確認された。また、当日は被害者や遺族、弁護団関係者（弁護士）に加え、かつての被告企業関係者、研究者、住民の参加もあり、薬害をめぐる多様な立場の関係者が同一の場に集う機会

となった。こうした点においても、本シンポジウムは、薬害に関する経験を社会的に共有する場ともなっていたと言えるだろう。

さらに、会場では本研究班の成果に加え、これまで関連して実施されてきた科研費研究の成果報告書等の展示も行い、薬害に関する研究の蓄積を可視化する機会とし、薬害をめぐる研究の広がりと継続性を示すことができた。

〇当日の様子





３．今後の課題

本年度は、薬害ポータルサイトの英文版の公開、冊子の作成、シンポジウムの開催を通じて、研究成果の発信および社会的共有に向けた基盤整備に一定の進展が見られた。これらの取り組みは、薬害に関する知識や経験を社会に伝えるとともに、薬害教育の基盤を整備するものとして位置づけられる。

今後の課題としては、まず、薬害ポータルサイトおよび冊子の内容をさらに充実させるとともに、継続的な更新・運用体制を確立していく必要がある。とくに、薬害教育の観点から、学習資源としての活用可能性を意識した内容の整理・拡充が求められる。また、国際発信の観点から、英文版のさらなる整備に加え、英語版パンフレットの作成についても検討を進める必要がある。

さらに、2026 年 12 月に予定されている昭和 100 年記念事業としての展示も見据え、これらの成果を展示・教育の文脈において活用可能な形へと整理していくことが求められる。

以上を踏まえ、今後は研究班本体および研究協力者を中心とした体制のもとで、これまでに蓄積してきた成果を基盤としつつ、薬害に関する記録の継承と薬害教育の推進に向けた取り組みを進めていく必要がある。

【参考文献】

本郷正武・佐藤哲彦編，2023,『薬害とはなにか――新しい薬害の社会学』ミネルヴァ書房.

薬害資料データ・アーカイブズの基盤構築・活用に関する実践的研究, 2025,「薬害（D.I.S）ポータルサイト」（2026 年 4 月 28 日取得，https://disarc.org/）